

TOPICS

- ① 2023年度の高等研3部門の研究活動について
- ② 今村先生、杉原先生による専任センター員就任のご挨拶
- ③ センター年報原稿募集のお知らせ

2023年度の高等研3部門の研究活動について

高等教育研究開発センターは、基盤教育部門、教育開発部門、そして数理・データサイエンス部門の3つから編成されている。センターの設置当初に比べると、10年を経て、組織として扱う業務対象や期待される機能が大きく拡充してきている。本年度の、各部門の取り組み課題について紹介する。

基盤教育部門においては、本年度からスタートした全学共通基礎教育科目のうち、英語科目について全学的に共通したシラバスにより授業運営が本格的に展開する。全学統一のプレイスメントテスト、アチーブメントテストについても、試行段階から本格運用へと移行する。これらのテストは成績評価の際に加味されることとなり、習熟度別のクラス編成への取り組みも含め、初年次レベルでの英語科目の教育改革は当初の目標地点に達する。今後は、点検と評価を繰り返し、教育内容と方法そして成績評価の精緻化に持続的に取り組むとともに、選択科目であるコミュニケーション英語Ⅳの教育内容や方法の具体的な検討に取り組む。英語の運用能力の向上と習熟を、自らのキャリア形成に活用しようとする学生の学習機会の幅を広げることが期待される。

数理・データサイエンス部門は、この分野の基礎的な能力の向上を図ることを目的に、認定プログラム制度へのエントリーに臨む。リテラシーレベルでの申請であるが、個々の学生の多面的なものの見方を醸成するという点からも重要な取り組みの一つと考えている。どちらかといえば、文系学生の多い本学にとって、近い将来に、全学共通の基礎教育科目の中に「文理融合のタイプ」の教育プログラムを取り入れるための初動的なチャレンジと位置付けられる。

さて、高等教育研究開発センター発足時から設置されている教育開発部門では、本年度は、3つのプロジェクトが展開する。一つは「アセスメントプランの再構築」のプロジェクトである。本学には、すでに教育成果あるいは学習成果を評価するための基本的な考え方の枠組みがアセスメントプランとして提示されている。しかしながら、大学を取り巻く環境の変化、学生の学修成果の把握や測定、あるいは可視化に対する社会的要請はますます強まっていることから、見直す作業に取りかかることとした。学生個々が、「自分は何ができるようになった」のかを説明できるようにしていくことも求められている。

このプロジェクトでは、本学のアセスメントプランを振り返りつつ、今日的に要請される事項等をサーベイし、より実効性の高いアセスメントプランの再構築につながる取り組みとなることが求められよう。二つは、「ルーブリックの再検討」である。ルーブリックについては、本研究センターの発足時の業績として、過去の認証評価においても高い評価を得ている。各学部や学科では、コモンルーブリック以外にも、多様なルーブリックが存在している。ルーブリックは、本学では、一般的な教育ツールとして様々な場面で活用されているところであり、このプロジェクトでは、本学のルーブリックの全容の把握と活用事例の有効性や課題等の整理が期待される。教育ツールとしてルーブリックは有用なものと考えられるが、「学修成果の把握・可視化」の観点からみた場合、これのみに依存してよいのか、本学のルーブリックの現状を踏まえ、教育改善に資するためのルーブリック自体の位置づけの見直しや精緻化の課題、運用面での確認と再検討を期待したい。三つは、「成績評価分布の公表」に関するプロジェクトである。この研究テーマについては、本セン

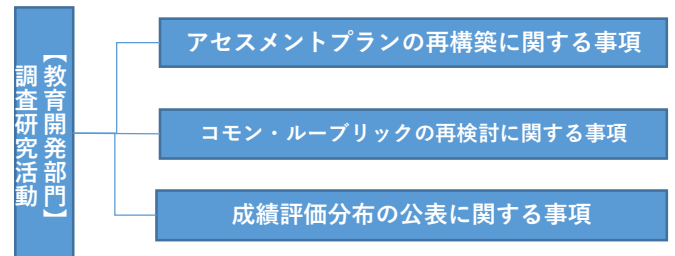


図1：調査研究活動によって進められる3つのプロジェクト

ターにおいて前年度まで継続的に進められてきたところである。成績評価の結果の分布状況の公表の方法等について、他大学の事例を含め情報収集からはじめていただくことになる。個々の授業科目の成績評価の基準や方法等は、我々教育する側にとっては教育成果の確認・見直しであり、学生からすれば自らの学修成果を振り返る際の基盤となるものである。成績評価の実態の把握は教育改革の起点である。

(高等教育研究開発センター長 副学長 下山昭夫)

「英語教育を通してさらなる主体的な学びの向上へ」 今村有里 「数理・データサイエンス・AI教育の更なる充実に向けて」 杉原亨

「英語教育を通して さらなる主体的な学びの向上へ」

今年度より淑徳大学高等教育研究開発センターに着任致しました今村有里と申します。高等教育研究開発センター基盤教育部門の「全学共通の英語教育プログラム」の開発に畑江美佳教授と共に取り組んでおります。

これまでは、中等教育における外国語教育、高等教育での言語学習アドバイジング及び外国語教育、高等教育の共通カリキュラムに関わる業務、教員教育に従事してまいりました。研究領域としては、言語学習者の学習空間の構築や日本における英語の多様性に焦点を当てた質的言語教育研究を専門としております。また、教育においては、自己主導型学習の要素を取り入れた授業運営やMOOC（大規模公開オンライン講座）等のICTを活用したカリキュラム・デザインをおこなっております。

今年度はS-Basicの「コミュニケーション英語I」、「コミュニケーション英語II」、「英語III」を東京キャンパスにて担当しております。また、千葉第二キャンパスで選択科目の「多文化と異文化理解」の授業も担当しております。言語や異文化理解の授業では、学生が既存の価値観に疑問を持ち、彼ら・彼女らの主体性や創造性を高められるような支援に努めております。具体例を挙げますと、自己主導型学習の要素を取り入れた「英語III」のクラスでは、「お気に入りの映画に出てくる役になりきってシャドーイングを行う」、「映画の台詞を分析し、自作のストーリーを英語で書く」、「自分が和訳した洋楽の歌詞とChatGPTが和訳したものを比較する」等、学生たちは自らの目標にあった学習計画を作成し実践しております。私自身、このクラスでは学生たちから学ぶことが多く、言語学習の無限の可能性を毎授業感じております。

学生たちの例からわかるように、言語学習の強みは、テキストや書籍だけにこだわらず、学習者の興味に合わせて教材や学習法を自由に選定できること

だと思っております。普段慣れ親しんでいるもの（映画や音楽等）や昨今話題の生成系AIへの視点を変え、試行錯誤しながら活用することによって、学習者個々に合った英語学習法が生まれるであろうと信じております。

最後に、新しい環境で様々な専門や興味をお持ちの教職員や学生の皆さまと交流させていただく機会を楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。

（高等教育研究開発センター 助教 今村有里）

「数理・データサイエンス・AI教育の 更なる充実に向けて」

皆様、はじめまして。この度2023年4月に高等教育研究開発センターに着任しました杉原 亨（スギハラ トオル）と申します。担当領域は、全学の数理・データサイエンス・AI教育で、いわゆる情報教育部門になります。また、専門領域は教育情報学を主として、ICT教育、地域創生とSDGsに関する研究に取り組み、近年ではこれらの研究領域を融合したテーマにも関心が広がっております。職歴としては、教育系企業のシンクタンク部門や、学校法人の職員、高等教育に関わるセンター教員の業務に従事してきました。

今年度より、全学の数理・データサイエンス・AI教育の担当として、学内の教職員の皆様と一緒に盛り上げていきたいと思っております。また、本学学生の現状をデータだけでなく、教職員の皆様のご意見、また学生自身の様子などを踏まえて、多面的に把握していきたいと考えております。さらには、キャンパスや学部学科（学問領域）の特性も考慮したいと思っております。こう書き連ねていくと、本学は7学部13学科の総合大学であり、多様な学生が学んでいることが改めて実感できます。

（次ページへ続く）

授業は、東京キャンパスでS-BASICの「情報リテラシー」「データリテラシー」を担当しています。

また、これらを発展させたものとして、大規模なデータでもクリックベースで直感的に操作でき、様々な図表にビジュアル化が可能である、Tableau（タブロー）に代表されるBI（Business Intelligence）ツールの活用や、社会の現場でリアリティーを持って取り組めるようなデータを活用した問題発見課題解決型（PBL）プログラムの開発も検討しております。

この原稿を書いているのは2023年6月段階ですが、情報教育で最も大きなトピックとしてChatGPTに代表される生成系AI（Generative AI）の台頭があります。世間の様子としては、何かAIですごいことが起きそうだ、というのがざっくりとした印象です。高等教育についても大きな影響を及ぼす可能性が論じられ、様々な情報が飛び交っています。私自身もChatGPTやマイクロソフト社が開発したBing（ビング）を、実験的に使ってみました。よく言われている性能に関する凄さは十分に体感でき、教育においても大きくアプローチが変化する可能性を感じました。ただ、少し言語化しにくい違和感もありました。この違和感は異物に関する拒否感なのか、AIに対しての信頼感なのか不明ですが、様々な要因かと思えます。この新しい人工知能をいかに適切な形、かつ段階的に教育に取り組んでいくかに関して、これまでの先入観や常識を一回外して、考えていきたいです。そのために、とりわけ教育に関連する生成系AIについて積極的に学んでいき、そして、それらを整理したものを率先して学内で共有していきたいと思えます。

最後に、千葉、東京、埼玉の3キャンパスが所在する地域は、今まであまり縁が深くなかった場所です。それぞれで教職員や学生の皆様と、触れ合う機会も多くなりますので、地域活動（懇親？）もして、人間的な幅も広げることができれば嬉しいです。これから何卒よろしくお願ひいたします。

（高等教育研究開発センター 准教授 杉原亨）

センター年報原稿募集のお知らせ

淑徳大学高等教育研究開発センターは、2023年度に「淑徳大学高等教育研究開発センター年報第10号」を発刊いたします。つきましては、原稿を募集いたします。ぜひご投稿ください。



募集する原稿について

① 論文

本学における教育方法の工夫や取り組み内容、国内外の高等教育に関わるテーマについて、「問題の背景、目的、方法、結果あるいは事例、考察、結論」という形で構成された研究論文。ただし、分量は図表を含み 400 字×50 枚程度を限度とします。

② 研究ノート

本学における教育方法の工夫や取り組み内容、国内外の高等教育に関わるテーマについて、研究論文に準ずる構成を持つ研究報告、サーヴェイなど。ただし、分量は図表を含み 400 字×50 枚程度を限度とします。

③ 資料

本学における教育方法の工夫や取り組み内容、国内外の高等教育に関わるテーマについて、学術的もしくは実践的に重要であると考えられる資料等。ただし、分量は図表を含み 400 字×25 枚程度を限度とします。

※淑徳大学の教員や職員、もしくは編集委員会が認めた者であれば投稿可能です。

申込締切

2023年7月21日（金）

淑徳大学高等教育研究開発センター（ページ下部記載）宛に、
件名：「センター年報原稿について」
本文：「お名前」、「ご所属」、「連絡先メールアドレス」、「タイトル（仮タイトルでも可）」、「原稿種別」、「おおよその分量」、「概要」を記載の上、メールをお送りください。

淑徳大学 高等教育研究開発センター NEWS LETTER 2023 第1号

発行日：2023年7月14日

編集：淑徳大学高等教育研究開発センター

TEL：03-5918-8948 FAX：03-5918-8968

E-mail：kaihatsu@soc.shukutoku.ac.jp